プロローグ

自宅近くの山道を少し歩いた場所。整備されていない薄暗い所からさらに逸れた獣道を抜けると、寂れた神社に辿り着く。

世間には心霊スポットと名高いが、地元民の間では厄除けの神様が祀られており性格も温厚であるとされている。

遠い昔、神社の周辺に村が存在していて村人を守ってくれたと言い伝えられている。だが、ダム建設や再開発などにより埋め立てられて以降、地元民以外の人が立ち入ることは無くなった。

お祈りや供物がすっかり途絶えた神様だが、災いが起こった事例はなく、御神木を誤って傷つける騒ぎがあっても神様は寛大な御心で許したという。

だが反面、厄除けの神とされながら、強力な縁結びの神としても恐れられていた。

一度祈れば必ず成就してしまう。例え、歪んだ愛情や倫理観を問われる内容であろうと、絶対に。

雑草が茂る参道を進んだ先、
「どうか、お願いします」
からりからりと拝殿の鈴が鳴り響いた。

薄幸影薄の雑魚女子に絞り取られて恋人エンド

参考書を無造作に閉じて大きく溜め息を吐く。

背もたれに体重を預け、昨日購入したばかりのアダルト動画を再生してみる。突発的に催したわけじゃなく行為前の確認程度だ。

学生だから財政難もあって新品の黒ギャル作品で致したい気分を抑えつつ、安価な作品で事足りるか、自らの愚息に問いかけていた。

「ケツえっっろ。イケそうだな、よしよし」

脇田（わきた）コウ、ちょうど受験勉強真っ只中の多忙な学生。成績は最下位から数えた方が早く、三食不摂生、連日オナニー狂いの変態である。

将来は公務員になるよう両親から言われていたものの成績の事を伝えておらず、期待に応える気は毛頭なかった。

「働いたら負けってね。明日やりましょっと」

筆記用具とノートを片付けて布団に向かう。

親に見られない所では基本半裸にブリーフ一枚。その自堕落っぷりは、縮むのを嫌ってわざわざ洗濯される前のブリーフを回収して穿くほど。
部屋も散らかっていて清潔感とは程遠い。
「コウ〜！　お客さんが来てるけどー！？」
下の階から母親の呼び声が響き渡る。
脇田は重い身体を起こす。鬱陶しく思いながらも、家族には最低限良い顔をしておきたい。
服を着て部屋を出て、階段の手すりに手をかける。
（待てよ。そーいえば思い当たる奴がいないが……）
性格は陰湿。一部の生徒を除き、先生とですら決して他者との会話をしない。関わることも当然してこなかった。
単純明快、友達は皆無。エロゲーにありがちな宿題を届けに同級生がやってくる展開も期待できない。
懐疑的な脇田は自分がイジメの標的でもされたのか不安視する。階段を下り終え、玄関の方をうかがう。
「あっ、こ、こんにちは……コウくん」

「あはは、私って性犯罪者なんだってこと、つい忘れちゃうね。脇田くんを騙して襲った悪い女。今度はおしっこをがぶ飲みしちゃおっかな。でも〜パイズリに敗北して『瑠海ちゃんこわいよー』って怖気づいちゃったかな、えへへ……♡」

鈴本は眉を八の字にして挑発的な視線を送った。

妙に煽り度の高い小芝居。普段は影に隠れているが、案外ノリが良い奴なのかもしれない。

「ほお、言うようになったな。やけに強気だ」

「当然。だって、おチンポ様を犯してるのは私なんだもん♡　泣きついても知らないよ。一度お口便器に入れたら、おチンポ様は袋のネズミ。金玉と膀胱が枯れるまで吸い尽くされちゃう♡」

ぺろりと舌舐めずりした。今にも獲物の首……雄の子種を狩らんばかりの雌豹の如き雰囲気。

元より鈴本を性犯罪者と蔑称した上で、躍起にさせて逆転の機会を与えていたが、主導権は常にこちら側にあると想定していた。

脇田は、自身がどんどん壁際に追い詰められていくような危機感を催す。

「うっわぁ……精液べっちょべちょのねっばねば♡　広げたり振っても全然落ちないよ♡